四章 決別を宿した心

　寒空の野宿にあって、の熱がを温める。ぱちぱちと火のぜる音を耳に、赤毛と黒髪という二人の女性が野営をしていた。

　夜空に映える満天の星の下、焚火を囲む女性の片割れが何気ない調子で尋ねた。

「君はどうして私と旅をしているんだい？」

「なんのことだ」

　野ざらしにされた問いに赤毛の彼女は、そらとぼけようとした。平坦な口調のまま、いつも通りの無表情で答える。

「成り行きに理由などない」

「あのなぁ。雑に誤魔化すのは、やめたまえよ」

　黒髪の女性が半眼でにらみつける。

「私がこの世界に来て、もう三か月だ。いやでも裏の事情というものはわかってくるさ。特に、こんな場所をいくつも旅すればね」

　二人のいる場所は、北部にある未開拓領域だ。五イン硬貨にも描かれた聖女マルタの伝承『月の奇跡』を追って、古代文明期の遺跡を巡っていた。

「清く正しい神官だなんて言ってるが、禁忌を処理するための処刑人が君だ。純粋概念を持っている私自身が禁忌なんだから、君は本来ならば出会ってすぐに私を殺していないとおかしい。この旅の中、君が多くの禁忌を処理したのと同じようにね」

　赤毛の彼女に問いかける女性は、夜気にれそうな黒髪を揺らしながら事前に拾い集めた枯れ木をつかみ、焚火に放り込む。

　異世界人である黒髪の女性は、元の世界に帰る手段が古代文明期にあると直感して、世界各地の未開拓領域で遺跡発掘に励んでいた。北部での探索では、軍事衛星との通信基地の跡地を発見して資料から衛星軌道を割り出し、己の純粋概念を使って軍事衛星が生きていることを証明してみせた。の彼女でも、そこまで大規模な古代遺物の存在に行き当たったのは初めてだ。

　けれども本来なら、こんな旅は成立するはずがない。

　赤毛の彼女は処刑人であり、黒髪の女性は異世界人なのだから。

「それなのに君は、私と一緒に旅をしている。しかもゲノムやカガルマから守ってくれさえした。いや、あの二人に異世界人である私を渡すのは君の立場からしても許されないのはわかるんだが……」

　ちらっといになり、彼女の表情をうかがう。

「守られている理由がわからないと、不安になるんだよ」

　わかるだろう、と甘えとねた気持ちとが半々となった口ぶりで問いかけてくる。

　異世界人である彼女の要望であちらこちらへと放浪の旅をして、付き合いも長くなっていた。ごまかすのも限界か、と判断した彼女は淡々と答える。

「罪悪感を知るためだ」

「……うん？　もうちょっと詳しく。君は言葉が足りないことが多いことを自覚してくれたまえよ。不親切だぞ」

　意図を伝えるのには、いまの言葉では足りなかったらしい。基本、言葉を交わすよりを交わした相手のほうが多いのだから仕方ない。

　自分の考えがどうすれば伝わるのか、彼女は言葉を探しながらぽつぽつと声に出す。

「人を殺すのは悪いことだ」

「そうだね」

「そして私は人殺しだ。いままでも、そしてこれからも、人を殺していくだろう。人が禁忌を求める限り、私は禁忌を狩り続ける」

「うんうん」

「だが私は、人を殺すのが悪いことだと感じたことがない」

「ひどいとは思うけど、君はそういう奴だよな」

　先ほど投げ入れた枯れ木が乾燥しきっていなかったようで、ばちりと焚き火が大きく爆ぜて火の粉を飛ばす。

「残忍で冷酷というより、君は合理的なんだよ。人を殺す理由があるのならば、人を殺すべきだという結論を下してしまう。普通の人間は人殺しをあらゆる選択肢の最後に置くが、君はかと握手をするのと同じくらいの気軽さで人を殺すという選択肢をとれてしまう人種だ」

　まさしく、その分析は的を射ていた。

　の孤児として引き取られ、多少の導力適性を見出されて処刑人として育てられたのが彼女だ。

　処刑人としてはもっともありふれた生まれと育ちをした彼女は、人殺しが悪だと知っている。けれども人を殺す際に心が揺れたことがない。自分が突き刺す人間の苦しみを感じられない。人を殺すことで世界にメリットがあるのならば、世界にとって邪魔な人間は殺すべきだと判断を下して実行できる。

　人を人と思わずに情緒よりも合理性を優先する彼女の精神性を、処刑人として天性のものだと評した人間もいる。羨望した同業者もいれば、人間として欠落しているとんだ神官もいる。

　その性質は様々な批評と弾劾、羨望と嫉妬の経験を経て彼女の中で積み重なり、一つの命題を突き付けた。

「罪悪感とは、なんだ？」

　黒髪の女性は、難しい顔をした。

「感情を問うのは卑怯だね。その人の中にない感情を、言葉で伝えるのは至難だ。それこそテレパシーか……そうだね。この世界なら、他人と導力接続ができたら、誰かの心を受け取れるかもしれない」

　もしそれができたら赤毛の彼女の疑問などく間に解決するが、人間同士の導力接続など夢のまた夢だ。相手の戯言に近い返答を聞き流して、話を続ける。

「人を殺すのは悪いことだ」

「そうだね」

「処刑人の多くは、精神の負担で人間として壊れる。壊れた人間は使いつぶされて終わる。罪悪感に壊されることが処刑人の罰なのだとしたら、私は人を殺す罰を無償で逃れ続けているんだ」

「うん？　もしかして君、罪に対する罰だのなんだのを気にしているのかい？」

「当たり前だろう？」

　相手の疑問は心外だった。彼女は当然だと答える。

「人を殺すのは、悪いことなんだ」

　もう一度、繰り返す。

　それがどうして悪いことなのか、心で感じることができないからこそ、自分には触れることのできない考えであるからこそ、彼女は人を殺すことが悪いことだと信じていた。

　左手で持つ教典に書かれた文言よりも、ずっと。

「だから私は、自分が罰されるべきだと考えている」

「ふうん？　が信条なのかい？」

「別に、善を望んでいるわけではない。悪に破滅しろという気もない」

　会話を続けながら彼女は空を見上げる。

　北部の未開拓領域では、夜に星々がきらめくさまを見ることができない。

　北の空に浮かぶのは、幾つもの巨大な白濁球だ。

　視界から空を覆い隠す白濁球が、昼も夜もなく空を回っている。いくつも浮かんでゆっくりと巡天している。

　四大のひとつ【星骸】の巡りだ。

　直接的な害はない景色を眺めて、彼女は呟く。

「ただ、罰があるべきだと思っている」

　彼女の知る限り、処刑人の終わり方に救いはない。どこかで野垂れ死ぬか、逃亡して同業者に討伐されるか、精神的に壊れて処分される。

　人並みの幸せというものを得られない生き方の救いのなさは、きっと『人を殺す』だなんて悪いことをした罰なのだ。

　ならば、自分にとっての罰とは、なんなのか。

　そもそも人並みの幸せなんてものを求めたことがない彼女は考える。

　罰というものは苦痛を強いることであり、不便を強いることであり、反省をし後悔を呼び起こすものだ。

　多くの人を殺してきた彼女だからこそ、もっともつらい人殺しを知っている。

　己に親しい人間を手にかける時だ。

「苦しむことが罰だというのならば、初めて得た友人に刃を突き立てることこそが、私にとって相応の罰になる」

　で卑劣であさましくも人殺しにほどの罪悪感も抱けない自分が、友情を語らい愛情を通わせた人間ができたのならば。

　そんな人物を殺すことこそが、自分を壊す最大の罰となることを祈る。

　自分自身で望んで画策し、自分自身でなんて馬鹿なことをしたのだと後悔するくらいになれば、素晴らしい。

「だから私は、お前がになるか、お前に友情を感じるまで殺さない」

　話を聞いた黒髪の女性は、とても嫌そうな顔をしていた。

「……ちなみに聞いておきたいんだが、いま君、私に対して殺害のためらいを覚えるかい？」

　じっと相手を見つめる。何通りか殺害方法をして、どれもがすぐに成立することを確信した。

「まるで覚えない」

「それはそれは。安心した」

　言葉とは裏腹に、の様子は見えない。非常に複雑そうな顔をしていた。

「いいかい、君は人殺しだ。君の言うところによると、人を殺したことは罪であり、罰を受ける必要がある」

「そうだな」

「ならばこれを受け取りたまえ」

　渡されたのは、紙巻のだった。どういう意図だと目で問いかけると、ふふんと胸を張る。

「煙草は消極的な自殺だ。有害な煙を摂取することに、なに一ついいことがない。だからこそ、罰として吸うといい。罰だったらそれで満足したまえ。自覚なく罪を重ねるなら、罰も自分ですらわからぬうちに体の内にため込めばよかろうさ」

「……ふん」

　悪くはない。

　そう思った。目に見えず、毒を吸い込み、少しずつ自分をんでいく。自分の体がどれだけ毒に侵されているのかの自覚がないというところが特に気に入った。

　くわえた煙草に一イン硬貨の紋章魔導で火を点ける。煙を吐き出すと、黒髪の女性はわざとらしく鼻をつまんでパタパタと手を振った。

「……いま気づいた。私は副流煙が嫌だから、吸うときは一人でやってくれたまえ」

　殺してやろうか、こいつ。

　吸った煙をにためて、思いっきり顔に煙を吹き付けてやる。

「おまっ、やめぇ！　それ、なんだかすごく嫌だぞ！　にを吐きかけられた気持ちだ！」

「そんなに敬遠するなら、なんで煙草なんて持ってた」

「私はそういうおなんだよ！」

　なるほど、とりあえず買ってみたが本人の趣味ではなくてポケットに突っ込んだままだったらしいことだけは伝わった。

　遠慮なく煙草をふかす彼女の隣で、女性は憤然と口を尖らす。

「私はになる気もないし、この世界から日本に戻る気だけど……一応言っておくよ、異世界の親愛なる私の友よ」

「なんだ？」

　初めて吸う煙草を十年来の愛用品のごとくくゆらせながら返答する彼女に、恨みがまし気な視線を向けて宣言した。

「君が私を殺したら、化けて出てやるから覚悟したまえよ？」

「脅しにならんな。お前のいた世界と違って、この世界だと残留精神の残骸が亡霊となることは、にある魔導現象だ」

　左手の人差し指で、とんとんと教典の表紙をく。

「お前が化けて出たら、残骸だろうが教典魔導ですぐにってやる」

「やっかましい！　君なんか嫌いだい！」

　旅の思い出。

　まだ彼女がにも位階を上げていない一介の神官であり、『』などという二つ名も持たない処刑人だった時代。

　この時には【光】の純粋概念を持った彼女へ、小さく甘やかで親愛なる殺意が芽生えていたことを自覚したのは、ずっとずっと後のことだった。

　＊＊＊

　聖地の崩壊より、半日が経過していた。

　魔物の群れの襲来を退け、『竜害』の発生を乗り越え、聖地の結界は再起動して真っ白な街並みを取り戻していた。

　立て続けに聖地を襲った災害から避難していた人々も、復興作業を始めている。やさしく発光する白い街並みの中、散乱した物品を運び出し、神官と修道女が混在して撤去作業や炊き出しを行う。普通の被災現場とは異なり、建築物の崩落がないことが救いだ。着々と元の営みを取り戻していく様は、始まりの地として知られる聖地は不滅であると心を打たれる光景だ。

　日が沈んでも復興を続ける人々に、メノウは紛れていた。

　マヤと名乗った少女やサハラとは別行動をとっている。彼女たちは、いまの聖地に入ることができない。聖地を構成する結界が原罪概念の侵入を弾くからだ。メノウは単身で行動していた。

　千年来のの大災害の後である。多少、様相がぼろぼろなのは気にされていない。いまはまだ、メノウのやったことを通達もされていないようだ。捜索、もしくは討伐の部隊が組まれている気配はない。

　聖地に戻ってからはモモと連絡を取るべきかどうか迷ったが、判断は保留にしていた。

　モモから連絡が来ていない時点で、彼女になにかがあったのは間違いない。教典を取り上げられていた場合、自分の情報を敵側に渡す恐れがある。メノウがな連絡を入れただけで、モモが聖地崩落に関わったことが確定する恐れすらあるのだ。

　聖地から離れるならば、まず東に向かうのが常套だ。というか、東以外に逃げる方向がない。聖地こそが、人類生息域の最西地だからだ。

　だが夜になってから、メノウは逆に向かった。

　人の気配を避けて、聖地を抜けてさらに西に向かう。

　大陸の最西端に近い聖地を超えて西に行けば、広がるのは人類未踏の未開拓領域だ。特にここから西部は、本当になにもない。岩場だらけの不毛の大地を三日も歩けば海岸線にたどり着いて、それで終わりだ。

　聖地より西にある建造物は、メノウも生まれ育った修道院だけだ。

　の暗部。処刑人の育成場所。日の目が当たることなく運営を続けられる、メノウの故郷ともいえる施設である。

　聖地から届くわずかな白い光と星だけが照らす丘を登れば、名前も彫られていない石柱が等間隔に並ぶ光景が広がる。身寄りのないの鎮魂を祈る墓地だ。

　ここを通り過ぎれば、の人間すら完全にいなくなる。

　石碑の合間を縫って、吹き抜けの墓地を見渡すと、目当ての人物を見つけた。

「……やはり生きていたか、メノウ」

　待ち構えていたのは、誰よりも見知った人物だった。

　『』。

　石碑にもたれかかって煙を吸っているの姿を見て、絶望するでもなく、警戒するのでもなく、ああ、自分はこの人の弟子なんだなと苦笑してしまう。

　は塩の大地を去る時に、アカリの体を回収した。殺す手段があって実行されたら止めようがなかったが、メノウはアカリの生存を導力のつながりで感じていた。

　アカリの姿はない。おそらく埋めて隠したのだ。

「修道院で休んでいてくれれば、嬉しかったんですけど」

　死闘を繰り返したあとだ。普通ならば安静にしているはずだろうにという問いを聞いて、は短くなった煙草を指で弾く。

「お前、まだこいつからの導力供給が続いているだろ」

　こくりと首肯した。隠す気力もない。アカリがとなった後も、メノウとの導力接続は絶たれていない。純粋概念の浸食は止まっているが、導力の供給だけは続いている。メノウが確信を持って迷わず墓地に直行した理由の一因だ。

　導力接続のつながりをメノウが辿ってくることを予測して、は待ち伏せしていたのだ。

「それにしても、なんだったんですか、最後のアレ」

「昔に管理権限を取得した古代遺物だ。古代文明期にあった衛星の概念は教えただろう？　昔の友人がいろいろ機能をいじくって、私の教典を端末にして起動できるようにしていた」

「そんなものあったとか、ひっどい切り札ですね。最初から使えばよかったじゃないですか」

「あまり思い上がるな。お前を殺すだけなら、あそこまではしなかったさ」

　が最後に放った攻撃は違いだった。月の欠片と見紛う質量が、天から高速で落下してきたのだ。古代文明期の遺産である衛星兵器の一撃に、小さな島でしかない塩の大地は粉みじんに砕かれただろう。が立ち去り際にアカリを指さし『海に落ちたら見つからない』と言ったのが、最後の攻撃の威力を示している。

　人を殺すには、あまりにも過剰な兵器を使用したの目的は明白だ。

「シラカミ・ハクアですか。……あの直撃を受けて生きてるんですか、あいつは」

「間違いなくな。伊達ではないぞ。【白】の純粋概念も『主』という称号も。あいつ自体は他の異世界人同様、平和に甘ったれているが── あまりにも、強すぎる」

　ふう、とが一息つく。地面に落ちた煙草を踏みにじって火を消しながら言葉を紡ぐ。

「お前がトキトウ・アカリに突き刺した『塩の剣』だがな。本当は、私が使うつもりだったんだ」

「はい？」

「【白】を殺すつもりだったんだよ。『塩の剣』がなくなったと誤認させて、塩の大地までおびき寄せたうえで、地面に残したで殺すつもりだった。この世界でを殺すには、『塩の剣』を使う必要があったからな」

「……そもそも『塩の剣』は、ハクアが生み出したものですよね？　効果はあるんですか？」

「効く。奴はこの千年で他の純粋概念を飲み込み過ぎて、【白】の純粋性を失った。他の純粋概念が使えるようになるたびに、肝心の【白】の魔導は弱くなっている。それを狙って【】どもは異世界人の純粋概念を暴走させていた節があるからな。いまの奴なら『塩の剣』は間違いなく効果があったはずだ」

　あ然とするメノウに、はなんてことのない口調のまま話を続ける。

「私はな、メノウ。お前がなんなのか知っていた。オーウェルのババアが【白】の再誕実験をして生まれたお前を見た時に、使いようがあると確信した。ハクアはいずれ来るトキトウ・アカリとの導力接続のためのプランをいくつか用意していたが、お前の存在を知ることで、あっさりと私を信用した」

　十年前の出会い。

　メノウはを下げて弱った表情になる。

「まだ少し、わからないのですけど……私は、どうやって生まれたんですか？」

「オーウェルのババアのことは覚えているな」

　無言で頷く。

　忘れられるはずもない。禁忌に手を染めた大司教。驚異の魔導行使者であったオーウェルに勝利できたのは、奇跡に近かった。

「奴は、昔はそれはそれはご立派なでな。事情を知ったことで、『主』の俗物ぶりが許せなかったんだろうな。理想的な『主』を作ろうとして、禁忌に踏み込んだ」

「理想の『主』を……？　でもあの人は、若返りを求めていました」

「その前の話だ。奴は魔導実験の末に小さな魂の生成を達成して、めとったハクアの肉体の一部を付与した。精神は後からできればいいと考えたのかは知らんが……ざっくり言えばシラカミ・ハクアが千年前に受けた実験の劣化再現で生まれたのが、お前だ」

　驚きはない。この段になって、自分が普通の両親から生まれたなどとは考えていなかった。

「古代文明期には魔導技術が到底及ばない現代で、お前ほど人間である人間をつくった実例を私は知らん。オーウェルはハクアの擬似であるお前に純粋概念を飲ませようとして、異世界人を召喚、接触させて……結果は知っての通りだ」

　滅んだ村で意識がはじまったメノウは、自分が生き残った人間だと思っていた。異世界人のによって、地図からも、自分の記憶からも消えたのだと。

　逆だった。暴走してになりかかっていた彼女の原因は、メノウにこそあったのだ。

「当時のお前は異世界人の純粋概念を飲み込んで取り入れるどころか、逆に相手の概念をすべて塗り潰した。当時のお前には、その程度の純粋性があった」

　メノウが起点となってあの村は滅びた。の村を一つ漂白した原因となったのがメノウだったのだ。幼いメノウの前にいた異世界人は、メノウを魔導素材とした実験に巻き込まれた被害者だった。

「お前という魔導素材は、『主』の代用として満足いく結果にはならなかった。奴は以降、お前を放流して自分が【】のような不死身になろうと研究の舵を切った。意外と、自分が『主』として君臨でもするつもりだったのかもしれんな」

「私に故郷なんて、なかったんですね」

「そうだな」

　グリザリカ王国で出会ったオーウェルは、はたしてなにを思ってメノウに『故郷』という言葉をかけていたのか。そんなことを考えながらも、まったく別の疑問を呟く。

「どうして私は、自分の名前を『メノウ』だと思ったんでしょうか」

　がここまで詳しく知っているのは、おそらく当時、オーウェルの身辺を探っていたからだろう。ハクアの肉体を掠めとったというあたり、彼女から指令が下ったのか、の独断だったのか。どちらにせよ、メノウはそこでと出会った。

「さぁ。そればかりは知らん」

　無関心な声が響く。

「私は、お前を殺すために育てていた。生物として完全無欠に近い【白】だが、奴の精神が不完全なお前の体に宿ればもできる。塩の大地におびき寄せることができると決まった時には、お前に【白】が憑依した瞬間に立ち会って、殺す。そのために、くだらん時間回帰にも付き合った。お前と出会った時から、オーウェルのババアからお前を押し付けられた時から、ずっと、お前を使いすつもりだった」

　長大な計画だ。十年──あるいは、もっと。アカリが行った時間回帰の年数も含めれば、の耐え忍んだ時間は膨大なものとなる。

　彼女は半生をかけて、【白】を討つ計画を立てていた。

「お前が生き残ったおかげで、計画はご破算だ」

「の思い通りことが運んだとして、アカリはどうなっていましたか」

「死んだだろうな。私にはあいつを生かす理由がない。となればなおさらだ」

　じゃあ、よかった。

　声には出さなかったのだが、メノウの考えを読んだのだろう。が顔をしかめた。

「『塩の剣』がなくなったいま、もはや【白】を殺す方法はない。少なくとも、私には不可能だ。いまはまだ私たちの行状は伝わっていないが、そのうちにハクアが教典を通じてに流布するだろう。お互い、追われる身になる」

　墓地で、二人は向き合う。

「もういいか？」

「はい」

　アカリを助けるためだけに一時的にとはいえ聖地を壊滅状態にれたメノウは当然として、もハクアに刃を突き刺したことでから追われることになった。

　同じ立場だ。師弟ということも加味すれば、共犯だと指名手配を受けてもおかしくない。

　その前に決着をつけようと、刃を向ける。

　が短剣を構えた。メノウも短剣を抜く。両者ともに、普段とは比べ物にならないほど緩慢な動きだ。導力強化の余裕すらなかった。教典は邪魔だ。発動できる余力もない。

「協力は、できませんか？」

「ここでお前を殺せば、ハクアはトキトウ・アカリと導力接続を行える魔導素材を失う」

　考慮の余地もないというの返答は、合理性に満ちていた。

「またお前と同じ存在を用意するのは手間だ。トキトウ・アカリのお人好しな性格を考えれば、お前という友人を失えば二度と誰かと導力接続をすることがなくなる可能性もある。奴が再臨する時間を稼げる以上、逃す道理はない」

　いっそメノウが自分の喉に短剣を突き立てたほうが世界平和に貢献できそうだ。

　だが残念ながら、メノウは世界平和のために自殺することなどできない。

　目的を同じとする立場にあっても、協力などはできないのだ。

「私はな、メノウ。自分の友を殺せた。いまだに罪悪感も後悔もない」

「……」

「けれども、お前はトキトウ・アカリを殺せなかった」

「それは……」

「自分の意思で殺さない誰かを選んだことを、お前は一生後悔するだろう。バカなお前のことだ。私と違って、お前は人を殺すたびに罪悪感に刺されていたのだろう？」

　の言う通りだった。

　甘いとなじられるだろうか。視線を逸らさないようにしながらも、そっとまつ毛を伏せる。

「お前が選んだ不平等は、お前に生涯付きまとって、いつかはお前を殺す罰になるが── それでいい」

　失った右足に【導枝】で義足をつくっている足先が、かつんと音を立てた。

「罰を受け続けて生きるお前は、清く正しく強い、悪人だ」

　ここまでぼろぼろにされて、殺意にさらされた。出会った時から使い潰すつもりで利用していたと明かされた。裏切りにって、失望しては恨みを抱えるのが普通なのだ。

　それなのに、ああ、ちくしょう。

　メノウは、喉を震わせる。

　認めるような台詞を掛けられるだけで、うれしくなってしまう。

「やめてくださいよ……未練が、湧きます」

「それが目的だからな」

　なるほど、納得だ。

　メノウは微笑む。が大口を開けて笑う。

　これが、最後だ。

　メノウは精魂尽きかけている。いまほどの悪条件で戦ったことなどないかもしれないというほどだ。構えた短剣を定めることもできず、ふらりと切っ先が揺れた。

『阳炎』　力を使い果たしているのは、も同じだ。彼女は長年の相棒としていた教典を失っている。塩の大地で見せたような出力は望めない。それどころか、失った片足の補助で精一杯だ。体幹のバランスは崩れ、完全な止血には至らずに失血が続いている。

　偶然ながらも、どん底まで落ち込んだ二人の戦力が釣り合っている。

　星の輝くなか、しめやかな決闘が行われた。

　派手な技の応酬などなかった。

　言葉での駆け引きも、熱い感情のぶつかり合いも。

　教典魔導も、短剣紋章も、導力迷彩も導力強化すらなく生身の二人が戦う。ここに至るまでの過程で、お互いにあらん限りの切り札を使った後だ。彼女たちがの処刑人になって以来、もっとも弱いでしのぎを削る。

　お互いに最後だと確信して、命をしているにしてはあまりに静かに切り結ぶ。

　星が瞬く世界でが重なる。

　勝ちを確信しているわけではないのに、メノウには恐れはなかった。

　二人きりで戦っていると、不思議とへの理解が深まっていく。

　彼女の精神は悪でもなければ、善でもない。中道だ。合理的で、残酷でいながらも人間的である。に比べれば、メノウはふらふらと蛇行した道を歩いている。

　不安定で不誠実で、迷ってばかりのくせに前にだけは進んでいるそんな自分の人生を、刃に込めて叩きつける。

　冷たい刃と殺意。

　切りつけることしかできない二つで、なぜかメノウとはつながっていた。

　アカリとの導力接続とは根本的に違う相互理解。戦い、刃を交えた間柄にだけ存在する不思議な信頼感。溶け合う快感もない。安心感も、温かさも、優しさもない。

　それでも、と戦うたびにメノウは成長していった。

　いまもそうだ。

　刃を交わすことしかしていないのに、どうしてこんなにもわかり合えるのだろうか。

　ほら、また。

　二人の道が交錯する瞬間が訪れた。

　吸い込まれる感覚で伸びたメノウの刺突が、の胸に突き刺さる。

　幻影でも、身代わりでもない、生身の確かな手ごたえ。

　まるで初めて人を殺した時のように、体のからぶるりと震えた。

　最後の力を振り絞ってか、が腕を振る。首筋に迫る短剣をとっさに奪い取った。

　の右足代わりに支えていた【導枝】が消えた。大量出血と同時に倒れ込む動きに攻撃の意思はない。ただ死ぬしかない人間の虚脱だ。

　膝から崩れ落ちたの額が胸元に当たる。の体を受け止めようとして、けれども腕は動かなかった。死にかけのを前にしても、両腕をふさぐことができなかった。

　立ち尽くすメノウの足元に命の温かさが染みて広がる。失った右足から、そしてメノウが突き刺した傷口から体外に流れるの血液が、血だまりとなっていく。

「なんだ……こんな、ものか………」

　迫りくる死を体感していながら、彼女の口から恐怖が吐露されることはなかった。命が抜けていく最中にあって拍子抜けしたとでも言いたげな声だ。

　友人と思った女性を殺しても罪悪感に囚われることはなかったのと同じように、弟子とした後継に殺されても彼女の心に絶望はなかった。

　忍びよる死の恐怖すら素通りさせる陽炎が揺らめいている。あらゆる死は、彼女に罰を与えることが出来なかった。

「なあ……『』………」

　『』が、メノウという『』に語りかける。

「次、は……お前が、やれ…………」

　敵になったメノウに託すために自分のを使う。他人の命の消失に痛みを感じないように、彼女は自分の命が消えることにも恐れを抱かない。なにせ彼女は戦う前、自分が負けた時のことを考えてメノウの問答に真摯に付き合った。

　自分とは違う自分の次がここで生まれることを知っているからこそ、死を前にしても罪に対する罰が『』を苦しめることはなかった。

　託すのは、希望ではない。

「『主』を……殺せ」

　呪いを告げられた。

　魔導などなくとも、導力など解さずとも、人の心にを打ち込める。彼女は自身の命を使って、メノウに道を示したのだ。

　幼い頃に、メノウが処刑人になると宣言した時に、彼女はやめろと言った。

　そういえば、なんではあの時、メノウを突き放したのだろうか。

　結果としてメノウは処刑人となったけれど、もしあの時にメノウが普通になる道を選んだら、どうするつもりだったのだろうか。

　利用するつもりだった。使い潰すつもりだった。彼女の話に噓はなく、直前までの思い通りにことが運んだ。

　それでもは、メノウに選択をする余地を残してくれた。

　一度はメノウを突き放したが、背中を押す。

「それが……お前の、救いに、なりえる…………」

　お前の道は、まだ続くと。

　が腕を上げる。まだなにかしようとしているのだろうか。メノウの肩より低い高さで手がさまよう。

　空ぶった自分の手に、は目を細めた。

　大きく口を開けて末期の息をらす。

「ああ、そう、か……くはっ……思い通りに、ならないわけだ」

　死にゆく者のか細い呼吸が、メノウの耳に届く。

　力を失ったの指が、神官服のを止めていたバックルに引っかかる。ぱちん、と音がして外れた。白い帯とともにのシンボルマークを胸元に示す金属が落下し、地面を跳ねる。

　いまさら拾う気も湧かずに目で追ってから、不意にの手の高さの意味に気がついた。

　旅をしていた時のメノウの身長は、ちょうど、神官服の胸元を止めるバックルと同じくらいの高さだった。

　たまらなく胸が締め付けられた。動かなかった腕が、やっと動いた。幼子がしがみつくように、ぎゅうっとを支えるために腕に力を入れる。

「じゃあ、な……めのう…………」

　それが、最期だった。

　もう、彼女の鼓動は聞こえない。



　死んだのだ。

　メノウには弱さを一度として見せることなく。

　最後まで天からすらも罰を受けることなく。

　伝説の処刑人、『』は、その生涯に幕を下ろした。

　すべてが終わった墓地で、メノウは短剣を地面に突き刺した。

　自分のものではない。が使っていた短剣だ。

　突き刺した短剣の柄を踏みつけにして、少しの休憩で回復したなけなしの導力を短剣に通す。

『導力：接続 ── 短剣・紋章 ── 発動【導枝】』

　無事に発動した紋章【導枝】を伸ばし、地面を探らせる。初めて発動させた紋章だ。操作にコツは必要だったが、メノウは持ち前の導力技術でコントロールする。

　さほど時間はかからず、目標物に行き当たった。

　アカリだ。

　予想通り地面に埋まっている。も【導枝】を使ってアカリを、石碑の下に埋めたのだろう。メノウは導力の枝をアカリの全身に巻き付けて引き上げ、彼女を掘り出した。

　時間停止がかかっているためか、地面に埋まりながらもほとんど汚れはなかった。軽く払えば、簡単に土が落ちていく。何度も抱き着かれたこともあってよく知っている温かさもやわらかさも、いまはない。触れても返ってくるのは硬く、冷たい感触ばかりだ。

　いまのアカリは、胸に刺さる塩の刃を鍵にした時間のの中にいる。

　事情を知らない人間が見れば、目を開けて固まっているアカリの姿は死体にしか見えない。それほどに生気が感じられないのだ。

　けれどもメノウには感じられる。

　アカリと魂からつながっている。メノウにしか感じられない鼓動が彼女の内にある。

　生きているのだ。

　うずくまった姿勢で固まっているアカリの顔に手を当てる。いまのアカリに導力接続で記憶を受け渡しても、片端から消費させられるだけだ。

　地面には、アカリが入っていた穴が残る。

　メノウは入れ替わりにの遺体を置いた。

　穴を、埋めていく。

　人を埋める深さの穴をもとに戻すのは、予想以上に手間がかかる。無心で作業をしながら、遠目に見える懐かしの修道院に思いを馳せる。

　中庭。講堂。共同の寝室。訓練場。ここからは見えないすべてに思い出がある。

　は一切ない。聖地の復興作業の影響で人員がほとんど出払っている。最低限の人員すらも残っていないのは、もしかしかしたら事前にがなにかを通達したのかもしれない。まだ裏切りが明るみに出ていない以上、修道院の統括者であった彼女には人員を動かす権限があったはずだ。

　逃亡生活に入って一番警戒しなくてはならないのは、の中でも処刑人か異端審問官だ。あそこから、いつかはメノウを殺す処刑人が育つかもしれない。

「それはそれ、ね」

　感傷に浸っていた自分を自覚して、微苦笑が口元を彩った。

　自分の生まれを知って、故郷なんてないと思っていた。

　けれども違った。

　そこにある修道院こそが、メノウの故郷だった。

　の亡骸を埋め終えたメノウは、一本の紙巻煙草を手元で遊ばせていた。遺体から短剣のを引き抜いた時に、気がついた。煙草が一本、お守りのように備え付けてあったのだ。

　たまにが吸っていたのと同じ煙草だ。

　一人、くわえてみる。

　紙の感触が唇に伝わる。変な感覚だ。

　一イン硬貨を取り出して指先に乗せる。

『導力：接続──一イン硬貨・紋章──発動【発火】』

　硬貨の中心から、ぽっと小指の先ほどの火が発生する。唇にわずかな熱気を感じながら、くわえた煙草の先に近づけるががすばかりで火が移らない。

　なんでうまく火がかないのか。眉間にを寄せながら何度かやっているうちに、偶然、息を吸ったタイミングで点火した。

　息を吸うか吐くかしないと火が点かないらしい。初めて知った仕組みに感心しながら、煙を吸ってみる。

「!?」

　を通った時点でもうダメだった。

　メノウの健康的でやわらかい喉を、煙がいがいがと突き刺す。慣れない刺激にむせかえった。こほんけほん、とせき込む。

「……まっず」

　なんだこれ。なにがよくて、こんなものを吸う人間がいるのか。臭い、まずい、体に悪い。口に入れるのには最悪な要素が三点揃っているくせに、発生する煙にはプラスになるものがないのだ。

　二度と、吸うものか。口には出さずとも、心の中であらん限りの罵倒を並べる。

　もし、いいことがあるとすれば一つ。

　涙がこぼれるくらい、目に染みるくらいだ。

　一人で泣くのに、理由が必要な時もある。静かな星空のもとで一人、メノウは慣れない煙草を一本、無理やり吸い続ける。

　灰とともに、雫が落ちる。

　地面に落ちたのは、どちらのほうが多かったのか。

　やがて唇に熱を感じるほど、煙草の火が迫る。メノウは短くなった煙草を指でつまみ、火の点いた先端を開いた教典に押し付ける。紙面に焦げ目が広がり、やがて、発火した。

　燃え始めた教典を目の前の石碑の上に置く。小さな炎が、メノウの顔を照らして頰を温める。金属部分だけ燃え残った教典が灰になれば、等間隔で並ぶ共通した石碑の一つが、少しだけ熱で色を変えていた。

　この下に、は埋まっている。

　メノウは夜空を見上げる。

　この空の下、とはつながらずとも、メノウは彼女が生きていることを疑ったことはない。自分を育てた伝説は、世界のどこかに常にいた。

　けれども、メノウの間違いを断罪してくれる存在は、もういない。

　メノウは自分の罪を自分で抱え続けることしかできないのだ。

「……」

　別れを言うかどうかためらって、のしかめ面が見えた気がした。

　もし情感たっぷりに別れを口に出せば、は全力で嫌がる。自分の中にの心が残っていることを自覚して、自然と不敵な笑みが出た。

　嫌がるなら、言ってやろう。

「さようなら」

　いまあるメノウのすべてを込めた声が、夜に響いて石碑に染みた。

　別れは済ませた。時間があるうちにやらねばならないことは多い。

　だからもう一人。

　メノウにとっても大事な、かわいい後輩に別れを告げなければいけなかった。

　モモは大聖堂の一室に閉じ込められていた。

　モモを閉じ込めたのはフーズヤードだ。なにをどうしてそう勘違いをしたのか、モモが彼女を襲ったのを『竜害』を見て取り乱しての凶行に及んだと解釈したらしい。モモを落ち着かせるためにと、再構成された大聖堂に叩き込んだのだ。

　閉じ込められているといっても、いまの大聖堂に人員は一人も割かれていない。出入り口のない建物にモモ一人で留守番をさせられているようなものだ。

　フーズヤードは『竜害』を発生させたのがモモだとはちっとも思っていないようだ。彼女からすれば、『竜害』はあくまで導力列車の事故が原因だと認識しているため、人為的な事件だったという発想がなかった。

　そうして雑に閉じ込められた大聖堂の中でモモは一人、ぶすっと不機嫌を丸出しにしていた。

　フーズヤードに不覚を取ったのも腹立たしいが、メノウの状況がつかめていないのが気分を最悪なものとしていた。

　大聖堂の中にある長距離転移を発動させるための古代遺物『龍門』は壊れていた。残った残骸でも短距離転移は可能で大聖堂の出入りはできたのだが、超長距離の転移ができるほど修復するのは不可能だとフーズヤードは真っ青になっていた。

　真っ青になったのはモモも同じだが、彼女の心配はメノウの安否に集中していた。

　まさか、転移した先に取り残されたのではないのか。だとすれば、どうやっても帰ってこられないほどに遠方にいる。崩れ去った駅ホーム『龍門』の残骸を前に、メノウの居場所をどうにかつかめないだろうかとモモが頭をひねっていると、目線の先で導力光が発生した。

　立ち上る光の扉は『龍門』の転移起動の前兆だ。フーズヤードだったらこの苛立ちを叩きつけてやると凶眼になったモモは、やってきた人物の姿を見て、ころっと表情を輝かせた。

「先輩！」

　快哉の声を上げた。

　探し求めていた人物の登場とあって、一瞬前までとは同一人物とは思えない表情でメノウに飛びつく。

「無事でよかったですぅ！　でもどうやってここにー？」

「【時】の純粋概念に触れてたせいか、短距離転移の『龍門』の魔導構成が簡単に理解できたのよ」

「そうなんですねぇ！　とは、どうなったんですかー？」

「は死んだわ」

「え」

　モモが絶句した。メノウは彼女の顔を見て、再度、疑いの余地もなくはっきりと告げた。

「私が、殺した」

　無形の衝撃がモモの心を打った。

　『』の死に、なによりもメノウが殺したという報告に意外なほどに心が揺れた。しばし押し黙り、事実を飲みこんだモモは詰まっていた息を喉から吐き出す。

「そう、ですか」

　モモは決然と顔を上げる。

「なら、モモも先輩についていきます」

　アカリのためにメノウがからするというのならば、モモはメノウのためについていく。

　を裏切ることに迷いはなかった。そもそもモモはメノウのために神官補佐になったのだ。

　だがメノウは静かに首を横に振った。

「ダメよ。モモには頼みたいことが二つ、あるの」

「頼みたいこと……？」

　いぶかし気にメノウのセリフを反復してから、直感がモモの脳裏を貫いた。

　モモはとっさに視線を巡らせる。アカリの姿がない。業腹なことだが、メノウはアカリを助けるために動いていた。に勝ったというなら、メノウの近くにあのやかましい少女がいてしかるべきである。

　そのアカリが、いない。

　矛盾する状況を見て、モモはメノウの頼みごとの内容を悟った。

「い、嫌です」

　ダメだ。

　モモはとっさに首を横に振った。なにかを言われる前に先回りで断った。

　そんなお願いごとは聞けない。聞けないのだから、聞いてはいけない。

「わかってる。他にこんなことを頼めるのは、モモ以外にいないの」

「やっ、嫌ですぅ……！」

　モモは必死に首を振った。メノウに対して、生まれて初めて恐怖を覚えていた。幼い日に戻った心地で拒否をする。

　なのに、メノウが一歩、距離を詰める。

「モモ」

　やさしく、名前を呼ばれた。

　びくりとモモの体が震えた。次の一言がわかっているからこそ、自分が逃れられないと知っているからこそ、涙がにじんでくるほど震えてしまう。

「お願い」

　声に詰まった。

　怖くも、強くも、冷たくもない。ただの優しい一言だ。

　それなのに、なんてひどい一言だろうか。こんなに卑怯な言葉はない。どうしようもなく、すごくすごく卑劣だ。

　この先輩は、よりにもよって自分に、トキトウ・アカリのことを任せる気なのだ。

　モモが断れないことを知って、頼んでいるのだ。

「私は、あなたにしか頼めないの」

　メノウに必要とされている。

　モモはそれだけでメノウのすべてを拒否することができないのだから。

「先輩……」

「うん」

「先輩は、ひどいです」

「ごめんね」

「……もっと、謝ってください」

「本当に、ごめん」

「…………全身全霊の謝罪を要求します」

　モモは、ぎゅうっとしがみつく。れた子供の顔を、メノウの肌にうずめる。

　メノウが、優しくモモの髪を撫でて指ですく。

「悪い先輩で、ごめん」

「ほんとですよ。……次は、ほめてください」

「それは楽ね。モモは最高の後輩よ」

「……それだけですか？」

「まさか。かわいい後輩で、強い補佐官で、一番信頼してるわ。いつも、ありがとう」

「…………他には？」

「大好きよ、モモ」

　よし。

　モモは顔を上げる。

　いまので全部、メノウのひどい頼みごとは許した。やはりメノウの笑顔は自分を底なしにチョロくさせる。際限なく都合のいい奴になっている自覚はある。



　けど、しかたない。

　メノウのきれいな髪に黒いリボンを結んだ時、初めて生まれた彼女の笑みに誓ったのだ。

　自分は、メノウのために生きることを。

　だからモモは、彼女のためだったらなんでもするのだ。

　まだ笑顔が戻るレベルではないが、それでもモモは前向きな方向に質問をする。

「先輩は、どうするんですか？」

「詳しくは言えないわ」

　情報の共有は危険を生む可能性がある。だからメノウは、逃亡の同行者が誰なのか、どの方向に逃亡するのかは告げなかった。

　それでも、目的だけははっきりと断言する。

「『主』を殺す。そのための準備を積んでいくわ」

「頼みごとのもう一つは、なんですか？　モモは先輩のことが大好きなので、先輩のお願いだったらなぁーんでも言うことを聞きます」

「あら、ありがとう。やっぱりモモは、最高の後輩ね」

　ほほ笑みながらメノウが頭を撫でて、モモは不貞腐れながらも先輩の手を受け入れる。

　二人とも、幼き修道院の日々を思い出しながら互いの絆を感じ合う。

「それで、もう一つの頼み事っていうのはね── 」

　彼女が彼女を殺す旅は、終わってなどいない。

　いま、ようやく始まったのだ。

　『』が不可能とめて途絶えた道の先を、メノウは歩き始めた。